「映画監督 増村保造のこと」

日本映画は、1958年をピークに観客動員を次第に減少させた。観客動員が多いということは、上映作品の多さを物語ることにもなる。1956年からの5年間を個別に見ると、1956年552本、1957年496本、1958年537本、1959年も537本、1960年581本という現在からすれば信じられない本数の作品が制作されていたことが窺える。映画製作会社6社（東映、日活、東宝、松竹、大映、新東宝）は、ほぼ週替りで作品の提供を行っていたことになる。これだけの大量の作品を制作することは、自ずと作品の質の低下を招くことになり、引いては1970年代はじめに大映の倒産を始め日本映画界に暗い大きな影を落とすことになってしまった。アメリカでアメリカンニューシネマの台頭があったことと比べると大きな落差を感じざるを得ない。

当時の量産された作品群は、プログラムピクチアと呼ばれた。ほぼ毎週の封切りに合わせるためには、低予算・早撮りの映画監督が重宝され、日本映画界の貴重な才能が過酷な条件の中で摩耗されてしまった恨みがある。一年間に5本、6本という作品を撮る監督がいたことは驚異というほか言葉が見つからない。たしかにこの時代には、溝口健二、小津安二郎、成瀬巳喜男、今井正、それに黒澤明もいた。こうした名匠、巨匠と呼ばれる映画作家たちも映画を撮り、数々の名作を生み出していた。考えれば不思議な時代でもあった。

その中で、大映に増村保造という映画監督がいた。当時は、映画会社が大学卒で助監督を募集、採用し、一種徒弟制度のような形で修行を送ることが一般的だった。増村保造は1924年甲府市に生まれ、東大法学部を卒業後1947年に助監督試験に合格し翌年本採用の助監督となるが、本人は戦後の混乱期でアルバイト気分だったらしく、再び東大哲学科に入学している。仕事と学業を両立させ1951年に卒業する。だが、これからが特異なキャリを送ることになる。ローマの映画実験センターの入学試験に合格し、ローマ留学を果たすことになるが、これは英訳した論文とシナリオの提出で決まったという。「イタリアン・ネオレアリズモ」のローマで、増村保造はルキノ・ヴィスコンティ、ミケランジェロ・アントニオーニに師事した経験を積み、1955年に卒業し帰国、溝口健二、市川崑の助監督に付いている。そして、1957年監督に昇進、本格的なキャリアを積むことになる。1957年のデヴュー作「くちづけ」から1982年の遺作「この子の7つのお祝いに」まで監督作品は57作品が、またシナリオ、テレビ作品などもありプログラムピクチャ監督として十分な実績を遺した。増村保造が監督として大映を過ごした時代には、演技陣には若尾文子、京マチ子、野添ひとみ、山本富士子といった日本映画界屈指の女優たちに、市川雷蔵、勝新太郎、船越英二、田宮二郎といった男優がいた。「座頭市」シリーズ、「兵隊やくざ」シリーズ、ミステリータッチの「黒い」シリーズの何本かも手掛けた実績を持つ。極めて商業ベースに寄った作品群の中で、増村保造の高い芸術性を感じさせる作品には、「清作の妻」（1965），「華岡青洲の妻」（1967）があり、特に増村保造らしさを感じさせる「赤い天使」（1966）がある。「らしさ」とは、人間観察における粘着性と冷徹さを備えた視線であると考える。人間の本能的な姿な赤裸々に描写するという点からすれば、今村昌平の存在があるが、増村保造には今村昌平のような土俗的、土着的な土の匂いが希薄な分、研ぎ澄まされた視線と美学が作品の空気と世界を創造しているように思える。

ここで一本の作品について述べてみよう。「遊び」（1971）は、大映倒産の時期のもので、言わば徒花的作品である。野坂昭如の「心中弁天島」を原作として、増村保造自身が潤色を担当したこの作品は、無軌道な男女の若者のどうしようもなく陰惨な過去と、これもまたどうしようもなくなった将来を描きながら、希望という光さえ見えない状態で、何の暗さもなく死に向かう二人を主人公にした秀作だ。二人の死は、大映という制作会社の死（倒産）と重なるし、増村保造本人のこれまでのキャリアの中断を意味することにもなる。すでに五十年以上前の作品であり、当時の日本の社会の貧困と無知による悲劇が極めて日常的に発生していた実情を現代に伝える作品でもあると思った。（12.25.2023）